

T市の幼児教育施設の園庭・公園の役割とその実際 —保育内容（環境）のための施設と自然の調査から—

木村 幸泰

要旨

環境保護やエネルギー問題が社会の大きな課題となる中、教育においても自然環境を視点にした学習が重視されるようになった。今回の幼稚園教育要領においても、領域「環境」でも遊びや自然との関わりを大切にした取り組みが求められている。では、都市化が進む地域や市街地の幼児教育施設では、子どもたちの自然体験の場が十分に整備されているのだろうか。その実態を明らかにするため、指標植物の設定しながらT市の教育施設の園庭や近隣の公園の自然環境を調査した。

その中で、子どもたちが自然と関わり遊ぶ場が十分に整備されていない施設の実態が浮き彫りになった。そして、この状況を改善するためには、都市整備の段階で教育を進める機関と都市インフラを進める機関の協働的な取り組みが必要なことを明らかにした。

キーワード 保育内容（環境） 自然体験 公園と園庭

1. 研究の背景と目的

現代の教育を語るとき、多くの場合、子どもたちの体験不足が話題になる。特に、都市部では、自然体験の不足が問題として指摘される。

平成30年に施行された幼稚園教育要領〔文部科学省，2018〕および保育所保育指針〔厚生労働省，2018〕では、領域「環境」のねらいが次のように示されている。

- (1) 身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。
- (2) 身近な環境に自分からかかわり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。
- (3) 身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。

また、その内容として、以下の12項目が示されている。^(註1)

- (1) 自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。
- (2) 生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ。
- (3) 季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。
- (4) 自然などの身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶ。
- (5) 身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。
- (6) 日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ。
- (7) 身近な物を大切にする。
- (8) 身近な物や遊具に興味をもって関わり、自分なりに比べたり、関連付けたりしながら考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。
- (9) 日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ。
- (10) 日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ。
- (11) 生活に関係の深い情報や施設などに関心をもつ。
- (12) 幼稚園内外の行事において国旗に親しむ。

ここでも自然と親しみ、かかわることが重要視されている。しかし、すべての幼児教育施設に、恵まれた自然があるわけではない。特に、都市部ではなおさらである。その場合、期待されるのは園の周辺の自然環境である。

ところで、厚生労働省は、平成13年に保育園の設置規準について「待機児童解消に向けた児童福祉施設最低基準に係る留意事項」〔厚生労働省，2001〕の中で次のような見解を示した。

児童福祉施設最低基準においては、満2歳以上の幼児を入所させる保育所は屋外遊戯場を設けることとされているが、併せて、屋外遊戯場に代わるべき公園、広場、寺社境内等が保育所の付近にあるのであれば、これを屋外遊戯場に代えて差し支えない旨も規定されているところである。

つまり、保育園等の園庭については、移動が安全で、日常的に使用できる範囲に公園や広場があれば代替できるということになる。では、実際に園にとって公園などの施設はどのような存在となっているのだろうか。

公園の利用について石田ほか（石田ほか，2021）は、園が地域のどのような施設を利用するかを複数回答可とした調査したところ、政令市や市町村の8割の園が公園を利用しているとの回答を得たとしている。この点については、昨年度、本大学で行った「S市・T市における「散歩」に関する質問紙調査^(註2)」でも、市街地に幼稚園・保育園の17園中11園が散歩先を「公園」とし、同様の結果を示していた。つまり、公園は幼児教育施設にとって貴重な遊びや体験の場となっていることがうかがえる。

では、実際に、子どもたちの自然体験の場がどのように整備されているのであろうか。そこで、以下のねらいで研究を進めることにした。

2. 研究のねらい

園庭と周辺の公園等の整備状況を客観的に評価できる調査をもとに、子どもたちの自然体験の場の整備状況を把握する。それをもとに、今後、どのように自然体験の場を確保していけばよいかを考察する。

3. 研究の内容

幼児教育施設の環境を語る時、「自然に囲まれて」「自然豊かな」という言葉が使われることがある。しかし、自然が周辺にあるだけで豊かな自然体験が成立するわけではなく、日常生活や遊びの中で自然と関わる環境をつくるかが問題である。

そこで、愛知県のT市の幼児教育施設と周辺の公園の自然と関わる場を調査し、子どもたちが自然と関わる場の整備状況と課題について考えることとした。

3.1.T市と幼児教育施設の園庭及び近隣の公園について

T市は、愛知県中部にあり、人口7万2000人のコンパクトな都市である。現在、駅を中心とした都市開発が進み、新興住宅地が広がる典型的なベッドタウンである。幼児教育施設としては幼稚園4園、保育園15園が存在する。その中で、今回の調査の対象は、子どもたちが自律的に自然にかかわることができるという意味で、年長（4～5歳児）が在園する16施設とした。

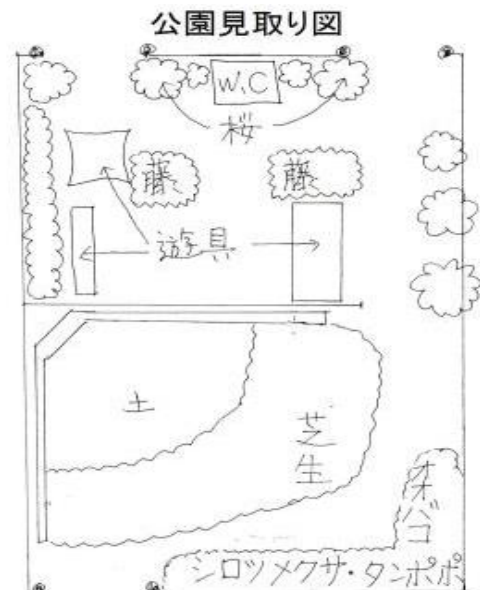
3.2. 自然環境を調べるための指標植物の設定

T市の場合、都市部や住宅地に幼児教育施設が集中しており、園庭や周辺の公園などの立地条件や自然環境は様々である。そのため、自然体験の場を客観的に調査・比較するのは容易ではない。そこで、まず子どもたちが遊んだり触れ合ったりする植物から指標となる草花を選定することにした。

ところで、公園に生息する草花について、伊藤ほか〔伊藤ほか，2020〕は、調査した公園の開設年が最も古い公園も新しい公園においても景観芝生の主要な雑草について、シロツメクサ、タンポポ、スズメノカタビラは共通してみられ、いわば公園芝地の随伴的雑草になっていると結果を得たとしている。

そこで、この結果を参考に、T市の住宅地にある典型的な公園を抽出して調査をした。資料1は、その概略を示した図である。この公園でも、シロツメクサやタンポポなど、伊藤の調査で見られた4つの植物が生育していることが分かった。特に、公園の端にこれらの植物の植物群が形成されていた。人が入りこみ、遊ぶスペースにあることで草丈の高い植物は生育していなかった。そのため、シロツメクサなどの4

資料1 T市の保育施設と近隣の指標植物



つの植物は、芝地の延長として子どもたちが遊ぶ場を形成していた。

ところで、これらの植物については、図鑑〔金子和代、金子洋一郎, 2020〕などでは次のような説明がされている。

- ・シロツメクサ：4～9月に草地や道端・空き地で群生をつくる。草冠づくりなどの遊びに使われ、4つ葉クローバーとして親しまれている。
- ・タンポポ（セイヨウタンポポ）；3月～10月に道端や荒地に見られる。笛や茎の風車などの遊びが知られている。
- ・オオバコ：道端や公園の人が出入りする場所に見られる。オオバコ相撲などの遊びに使われる。よってこれら「シロツメクサ」「タンポポ」「オオバコ」の3つを指標植物とし、自然体験の場について調査することにした。なお、スズメノカタビラは、ほとんどの場合、雑草として処理されているため、指標植物からは除外した。

3.3.T市の幼児教育施設の自然体験の場の整備状況の調査

T市の幼児教育施設は19施設である。この中で、主体的に草野草遊びができるようになる年齢を4・5歳と仮定し、この年齢の保育が行われている表1に挙げたA～Pの16施設の園庭と周辺の公園について調査を行うことにした。市内の幼稚園および保育園の一覧を基に現地調査を行った。期間は、令和4年5月21日から令和4年5月23日であった。また、調査においては、直線距離200m（徒歩数分）を日常的な利用範囲とした。

3.3.1. 調査結果から

調査の結果、園庭に指標植物があるのは6園、その中でもA園は、畑も整備していた。また、園庭に指標植物がないのは、10園であった。そのうちの4園は近隣の公園に指標植物があり、自然体験の場が確保されていた。さらに、11園のうちの残り6園は、近隣の公園がないなど、自然体験の場が確保できない状況にあった。

この中で、特に目についたのは公立の新設の保育園である。園庭は十分な広さがあったが、遊具エリアや運動場として整備され、草花がある自然体験のためのスペースがまったくない状況であった。さらに、興味深かったのは、田畑の自然に囲まれた園であっても、園庭に指標植物がなく、周辺に子どもたちが遊ぶ公園などが無い施設があったことである。この場合、周辺の道路は車が走っているため、田のあぜ道などを散歩する活動はできても、子どもたちが遊びの中で、自然とかかわるのは難しい状況にあった。

一方で緑がある園でも、サクラなど景観を意識した少数の樹木・生垣以外またはプランターの栽培花があるのみの園がほとんどであった。

この結果から幼児教育施設の1/3は、園庭よりも公園など、園外の自然環境に頼っていることが明らかになった。また、近隣の公園において、遊びながら自然体験ができる公園は、4園であった。

表1 T市の保育施設と近隣の指標植物

名前	私公立	園庭 ※1	公園 ※2	備考 ※3
A	公設	○	○	
B	公設	○	×	新設
C	公設	○	×	
D	公設	○	×	
E	私設	○	×	
F	私設	○	×	
G	公設	×	○	公園隣接
H	私設	×	○	公園隣接
I	私設	×	○	寺隣接
J	公設	×	○	公園にドングリ 新設
K	公設	×	△	新設
L	公設	×	×	新設
M	公設	×	×	
N	公設	×	×	
O	私設	×	×	
P	私設	×	×	
※1 園庭:○3つの指標植物あり、×なし				
※2 公園:○200m以内で指標植物あり、△200m以内で指標植物なし、×200m以上で日常使用不可				
※3 隣接:フェンスまたは歩道を挟んで設置 新設:数年内に設置・改築				

4. 考察

4.1. 自然体験の場について

ここまで、述べてきたように、「環境」を含めた幼稚園教育要領のねらいにせまるためには、園庭の整備や公園の自然環境の整備が必要不可欠である。しかし、公立・私立に限らず、園庭の広さは確保

できていても、それが自然体験の場としての有効性があまり期待できない園がいくつもあった

これらの園では、プランターで植物の栽培をしたり、どんぐりや落ち葉などを教室に持ち込んだりするなど、子ども達の自然体験の場を作るために努力している保育者の姿が見えてくる。

このような都市部の幼児教育施設で、これらの課題を根本的に解決するには、都市整備の段階で教育を進める機関と都市インフラを進める機関の協働的な取り組みも必要であると考えられる。

資料3は、Y市の中心部にある保育園周辺の図である。Y市では、駅前の再開発の段階で駅前の公園や野球場などや保育園などのインフラを一体化しながら整備をおこなった。このことで、都市としての機能や住民の利便性のアップだけでなく、保育園の環境整備が行われることになった。もちろん園児たちが遊びながら自然とかかわる場も作り出すことができた。この取り組みは、都市整備の在り方に一石を投じる例と言えるのではないだろうか。

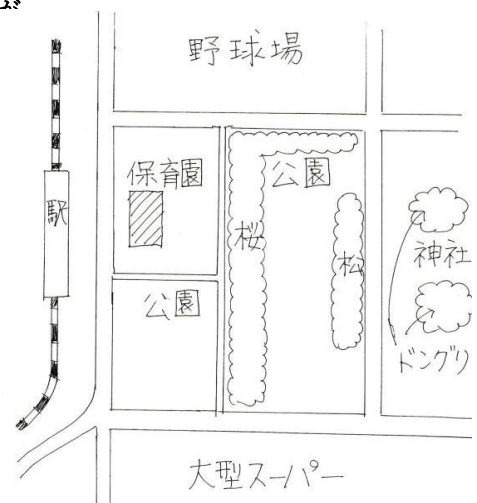
5. まとめ

ここまで、指標植物を設定し、客観性を持たせながら都市部の幼児教育施設の自然体験の場を調査してきた。幼稚園教育要領に示された環境に対する教育の必要性は、誰もが認めることであろう。しかし、現実には、幼児教育施設の自然環境の整備は、土地開発予算的な制限を考えると、一幼児教育施設で解決できる問題ではない。

また、先にあげたY市の例だけでなく、国や自治体では新たな動きもみられるようになってきた。2015年9月の特区法改正で、公園内に保育所などを設置することが可能になった。東京都荒川区では、2015年11月に全国初の認定を受けた。これを受けて荒川区が設置した「にじの森保育園」は、約12.9haの都立汐入公園を「園庭」として使用し、子どもたちが自然の中で伸び伸びと遊ぶことが可能になった。

教育は、100年の計。Y市のように、自治体が市民の理解を得ながら、長期的・計画的な立場に立った都市づくりの中で、保育環境の整備が進められることを期待したい。

資料2 Y市の都市計画により自然環境



註

(註1) 幼稚園・保育園の取り組みは、幼稚園教育要領に準ずるものとして論を進めることとする。

(註2) 保育園、認定こども園もしくは幼稚園に勤務している保育者を対象のWebによる質問紙調査を実施した。

引用文献

- 石田佳織ほか(2021)：幼稚園・保育所・認定こども園での地域活用の実態に関する全国調査
公益社団法人日本都市計画学会都市計画論文集M)1.56N0.1, 伊藤操子・伊藤幹二・小西真衣(2020)：
公園緑地の雑草発生状況と管理の課題：広域実態調査からみえること, 草と緑(Weeds and Vegetation
Management)12:1-15 厚生労働省(2017)：保育所保育指針, 最終アクセス2022.6.7
https://www.mhlw.go.jp/web/t_doc?dataId=00010450&dataType=0&pageNo=1
厚生労働省(2001)：待機児童解消に向けた児童福祉施設最低基準に係る留意事項等について, 最終ア
クセス2022.6.7 https://www.mhlw.go.jp/web/t_docdataId=00tb5653&dataType=1&pageNo=1
文部科学省(2017)：幼稚園教育要領 平成29年告示, 最終アクセス2022.6.7
https://www.mext.go.jp/content/1384661_3_2.pdf

参考文献

- 金田初代・金田洋一郎(2020)：『持ち歩き！野草・雑草の事典532種』株式会社東西社

The Role and Actual Situation of Gardens and Parks in Early Childhood Education Facilities in T City

Yukiyasu KIMURA

Key Word : Content of Childcare (environment) Nature Experience Park and Playground